

## 交流センター館長を務めることになって

深田三夫

令和元年4月より宇賀荘交流センター館長を勤めることになりました。私は地元宇賀荘町の生まれですが、約40年間の県外での生活の後、定年を前にして故郷に帰ってきました。40年間の時の流れはあまりにも長く、ふるさとの風景で変わらないのは大山の雄大な眺めとゆったりした伯太川の流れくらいです。一番困ったのは、当たり前のことですが世代が交代しており、町内会や集まりにでても知らない人が多く、「あんた、だーだかいね」「あらー、さかねのみっちゃんかあー。よー戻ってきたなあ」。こんな感じです。生まれ故郷から出たものは定年を機に故郷に帰ってくるのが当たり前だと思っていたのですが、現実はそのではなく、いったん家を出たものは帰ってこないのが普通で、私のように家族で帰ってくるのは珍しいようです。

まず始めた仕事は私一代で荒らしてしまった田んぼ、畑、山を整備することでした。それと、できるだけ多くの集まりに参加して私の名前を憶えてもらうことでした。慣れない農作業や山仕事も近所の方に手取り足取り教えてもらい、3年たったころにはわずかですがJAに米を出荷できるようになりました。そんな平穏な“晴耕雨読”生活を送っているときに交流センター館長の要請が届きました。晴天の霹靂とはこのことです。私は長く大学の教員を勤めました。大学の先生といえば典型的な“井の中の蛙大海を知らず”の人種です。公民館の館長は普通、地元を知り尽くし、ボランティア精神をもったいわゆる地元の名士になるものとばかり思っていました。さてよ、私のような世間知らずに声がかかるとしたら、何かわけがあるに違いないと思うことにし、日々その理由を考え続けました。やがて、長いこと地元を離れていたことが私に声がかかった理由ではないかと思うに至りました。

日本は狭い国ですが、一つ川の流域が異なれば違う文化や考え方が育つ、その意味で多様な風土を有する日本は大国であるとは、松江が生んだ世界的な仏教哲学者の中村元先生の言葉です。外から見る目を養うことも大事ではないか。この地にもこれまでに育まれてきた独特の文化、考え方がありますが、外の文化や考え方をすることも大事ではないかと思うに至ったものの、私に新風を吹き込む力があるはずもなく、2か月過ぎた今も悶々とする日々が続いています。しかし、「千里の道も一歩から」です。考えているだけでは事は運びません。新規館長採用者に対する市の研修を受け、また二人の経験豊かな主事からいろいろと教えてもらいながら、館長の仕事をスタートしました。これまで公民館を利用していた立場から見る風景と、いざ中に入ってみる風景とは違うことに気がつきました。目標とするのは「共育」です。地域の皆さんがここに集い、お互いの交流を通して自分自身を高め、最終的には皆さんの力を地域に還元できること。こんなことを考える日々です。